

温故知新

高木 啓吾

東邦大学医学部外科学講座呼吸器外科学分野（大森）教授

1955年に発刊された加藤恭亮著「東邦大学三十年史」に、東邦大学創設者の一人である額田 豊先生が記した巻頭言「温故知新」がある。1923年相模湾沖北西80kmを震源地とした関東大震災の灰燼消えやらぬ1925年に東邦大学が創立され、その後の約20年間、満州事変、日華事変を経過し、そして太平洋戦争でほとんど灰燼となった大学を戦後10年間で再建した折に刊行された書である。内容の一部を紹介しよう。「このような相次ぐ万難に屈せず関係者一同日夜刻苦精励の結果、幸に復興が着々として進んだことは御同慶の至りであるが、之を以て足れりとせず、更に規模の拡張と内容の充実とを計って、新時代の要求に即応する使命を果し得るに足る特徴ある大学を造り上げるために、目下具体的な対策を樹てつゝあるのである。（——中略）。本書が故きを温ねて新しきを知る機縁となり、（——中略）、全学一心一体建学の使命達成に一路邁進する覚悟をお互に新たにすることが出来れば、欣び之に過ぎるものはない。諸士の御健闘を切に祈る所以である。」とある。東邦大学のルーツを知るには、この本を読みてよ。セピア色だが、今でも実に新鮮であじのある内容であり、大切にしている。

さて、この「温故知新」という言葉は、もちろん、医療の現場でも大切な言葉であり、私の好きな言葉の一つでもある。私が医学生であった約40年前、手術室での手洗いに約20分、肺癌手術は6時間もかかり、合併症も多く、術後退院までに1カ月も2カ月もかかっていた。それが、今や、手洗い4分、手術時間3時間、退院が約1週間以内までに短縮した。肺癌手術は、今では簡単な手術と思われるかも知れないが、手術のピットフォールを丹念に解決してきた成果であり、この過去の経緯を知っているからこそ、周術期偶発症を起こした時の次の一手を心得ているし、より安全で確実な手術を求めて未来に向かって進化していくのだろう。

また、内視鏡検査といえば、消化器疾患であれ呼吸器疾

患であれ軟性鏡であることは言うまでもないが、その前身はあの辛い検査とされた古臭い金属性の硬性鏡であった。その硬性鏡が現在、全身麻酔気管支鏡下治療に応用され、急性呼吸不全に陥った中枢気道狭窄の治療で良好な成績を出している。過去の経験が、今に生かされて、未来へと続く。

「歴史とは、過去と現在と未来との鼎談である」という。過去の思い出だけを知るのではなく、そこに至る多くの事象を分析し、未来につなげるところに意味がある。私がかつて旧国立がんセンター（現国立がん研究センター）外科レジデントとして勤務したその初日に、エレベータの中でオンコロジストの仁井谷久暢先生（元日本医科大学呼吸器内科教授）から、突然大きな声で「俺たちが言っていることは、嘘っぱちだから、信用するなよ。いいか、高木君、君も自分が思っていることを精一杯言いなさい。」と叱咤激励された。いやはやビックリした。15秒間の密室のなかで顔がこわばったのを、今でも鮮明に思い出す。事実無根の発言を奨励したわけではなく、過去の真実を知ることの大切さと未来にむけたチャレンジ精神の大切さを示唆したものだ。今はやりのEvidence Based Medicine (EBM) でひとくくりになされた過去の事象だけを楯にして、真実を発見するにはまだまだ無理があるし、未来は語れない。

過去の真実を軸に学問が発展する。いつの世も論文ねつ造事件が露呈するが、事実無根の論文は絶対に許されない。真実をねじ曲げる大犯罪であり、その学会誌の品位をも汚すことになる。編集委員や査読者は無理な事象や論理を見抜かなくてはならないから、日常業務に加えて、手間のかかる大役を引き受けることになる。過去の真実を知らずに、新たな事象は判断できないからだ。本誌に携わる関係諸兄の献身にあらためて深謝申し上げるとともに、本誌のますますの発展を祈念したい。

「温故知新」。いつの世も、そしてどのような場でも大切にしなければならぬ言葉である。